虚子記念文学館投句特選句・令和三年九月

稲畑汀子　選

２０２１／令和３年０９月

俳磚の詩の余韻や月の庭　京都　西村やすし

爽やかな館俳磚に囲まれて　新潟　安原　葉

どの花もみんな小さく大花野　兵庫　池田雅かず

虚子館の俳磚磨く秋の雨　石川　村上秀吾

雨昏む庭に露けき水の声　兵庫　西村正子

心耳もて聞く虚子の声秋の声　石川　伊東弥太郎

不規則を美しく装ふ秋の浪　兵庫　河野ひろみ

唐突に今朝唐突に彼岸花　兵庫　金田八江子

真筆を拝し身近に子規忌かな　兵庫　二瓶美奈子

秋の海テトラポッドに野球帽　兵庫　武田奈々

（青少年）

入選句・令和三年九月

吾亦紅街の花屋で良く売れて　大阪　窪田由紀子
濡れ残る空へ染み入る秋の蝉　奈良　河村久美子
虚子館を開けて白露の風通す　兵庫　平田　惠
さやけしや半年振りの芦屋句座　兵庫　森岡喜惠子
雨止んで虫鳴く庭に戻りけり　大阪　山下幸典
消息を知りたく訪ふも句座の秋　大阪　石橋玲子
足もとの風やはらかき萩の庭　兵庫　小柴智子
九十はこれからの歳菊の宴　大阪　生澤瑛子
露けしや遊亀の原画幾度も　兵庫　内田泰代
松虫草見ざる三瓶の汀子句碑　大阪　田村禮子
天の川命を思ひ父母語る　兵庫　黒田千賀子
爽やかや園丁親しく応へくる　兵庫　髙野さち
聞き分けることの楽しみ虫の夜　大阪　杉山千恵子
秋出水命を守れと予報官　兵庫　宮本露子
伸びやかに花野分けゆく水音かな　兵庫　吉村玲子
七草のかすかな風を胸に抱く　兵庫　山田佳乃
記念樹に触れさうな空いわし雲　石川　辰巳葉流
流木の思はぬ重さ秋の海　兵庫　武田優子
虚子館の庭より仰ぐ天高し　大阪　辻田あづき
ワクチン終へ妙に強気に蚯蚓鳴く　兵庫　槌橋眞美
手術後の寝苦しき真夜蚯蚓鳴く　大阪　西尾浩子
銀輪の声を遥かに蕎麦の花　兵庫　中村恵美
秋出水いつもの川の違ふ顔　兵庫　玉手のり子
砂文字のさよなら攫ふ秋の浪　兵庫　涌羅由美
語り部としての一歩や終戦日　兵庫　中井陽子
とんぼうの縦横無尽といふ軌跡　兵庫　深尾真理子
千枚の音重なりて落し水　大阪　山田　天
いつまでと思ふ疫病や秋暑し　兵庫　永沢達明

これよりの静かなる日々富士に雪　兵庫　岸川佐江
句をひねる力となりし夜食かな　兵庫　高橋純子
虚子館に静かな闘志ホ句の秋　兵庫　藤井啓子
露けしや今の暮らしを受け止めて　大阪　林　曜子
約束は遠のくばかり早九月　奈良　好川忠延
風の神祀る九月やおわら節　兵庫　小杉伸一路
逝きし人胸に棲みつき虫の闇　兵庫　岩水ひとみ
秋灯下机上にでんと投句箱　兵庫　長安悦子
波音の深き藍色秋の海　兵庫　奥田好子
比良比叡伊吹の眺めホ句の秋　石川　辰巳昌彦
棲み古りし里の家並や秋すだれ　大阪　徳永由起子
蜻蛉の軽さは風に乗る軽さ　大阪　綿谷千世子
蚯蚓鳴くを聞きたる人にまだ会へず　兵庫　前田容宏
改めて仰臥漫録繰る子規忌　大阪　河辺さち子
水害のありし川原に草の花　兵庫　鎌野光子
山からの水で育てし稲の花　兵庫　小川孝子
地の塩になれず老ひゆき男郎花　兵庫　湯川晶月
重さ見すしほからとんぼ枝の上　兵庫　西村みどり
千五百号へホ誌の軌跡に秋の声　岡山　奥山登志行
月白く紺屋ひとつの染め残し　兵庫　朱麻
路地裏を秋の足音追ひかくる　奈良　堀ノ内和夫
ボリュームを下げ聴くオペラ夜の秋　兵庫　福間笙子
貨車と貨車あいだに見える秋桜　兵庫　鈴木秋峰
秋簾揺れて侘しさ増しにけり　兵庫　山岸正子
人も来ぬ古代の寺跡草の花　兵庫　入谷千惠子
句座に活け白の清しさ子規忌かな　兵庫　伊藤秀子
野に濡れて光り合ひたる草の花　兵庫　柄川武子
ポストまで名月連れて四半時　兵庫　道中義臣
ホトトギス誌守りて幾年糸瓜の忌　兵庫　大西美知子

捥ぐ人も食む人も無く石榴裂け	兵庫	雲山緋毬
ふる里はほつとする空草の花	大阪	辻　昌子
滅びゆく砂のシャトーや秋の浜	兵庫	塚本武州
直立の案山子に帰るねぐらなし	兵庫	高市敦之
鹿垣の丈より高き山の寺	兵庫	キートスばんじょうし
蒼穹を十字のかたち鷹渡る	愛知	小野　薫
秋の声うす墨で記す名前かな	神奈川	平野孤舟
秋澄みて芦屋の松のあをあをと	兵庫	阿曽宏之
盆の月ホームの父へ昇る頃	神奈川	小堀公美子
俳磚の紺に寄り添ふ秋の蝶	兵庫	田村惠津子
ひとり行く馴染みの道や草の花	東京	木村三球
美しく老いゆくやうに女郎花	埼玉	土井洋子
いくまんの宇宙宿るや露万朶	東京	宮村土々
沖に舟ひとつ置かれて秋の海	神奈川	進藤剛至
茜雲手繰り寄せたる烏瓜	神奈川	金子三奈乃